

テーマ 1

発達障害の気づき

医療法人童心会 まつもとこどもクリニック
松本眞一

2021.01.13熊本学園大学付属敬愛幼稚園研修会

0 歳後半

大人とのやり取り遊びができる

- 目が合う
- 体を揺らすと喜ぶ
- イナイイナイバーをすると喜ぶ
- 微笑みかけると微笑み返す
- 名前を呼ぶと反応する
- 他の子どもに反応する

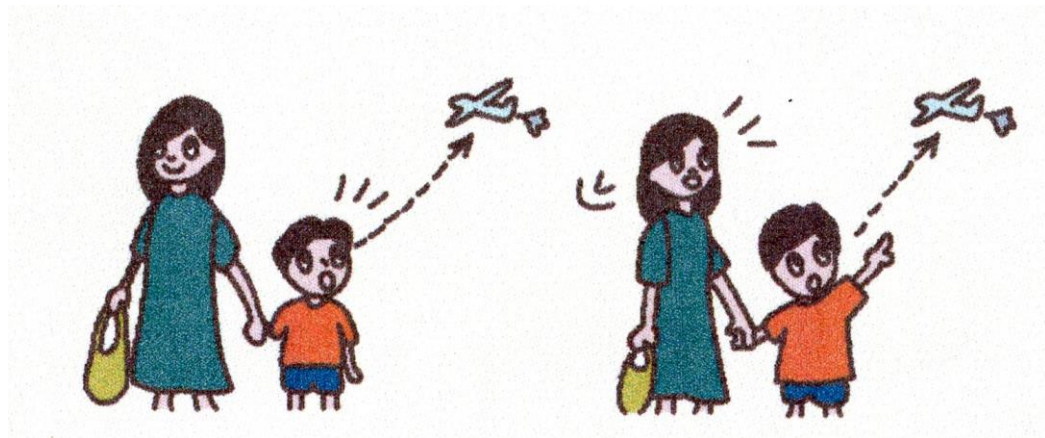
■ ワンポイントアドバイス

イナイイナイバーや体を大きく揺らす等、身体を使った遊びを、微笑みながら、目を合わせて、一緒に楽しみましょう

11ヶ月～12ヶ月

お子さん自ら様々なやり方で大人に自分の意思を伝えようとしてくるようになる

- 大人の注意をさかんにひこうとする
- 大人の真似をする
- 大人が指差したものを見る
- 欲しいものを指差して伝える
- 興味があるものを指差して伝える



● ワンポイントアドバイス

遊びの中で大人がお子さんの真似をしたり、お子さんが大人の真似をしたくなる様な関わりをしてみましょう。

お子さんは、喜んでもっとやって欲しいと要求してくるでしょう。また、お子さんが欲しがったり、興味を示しているものを見つけたら、一緒に指差しをして、顔を見ながら優しく言葉をかけてあげて下さい。

お子さんは、色々なものを指差しして、もっと伝えようとしてくるでしょう。

15ヶ月～17ヶ月

コミュニケーションの表現方法がますます複雑になってくる

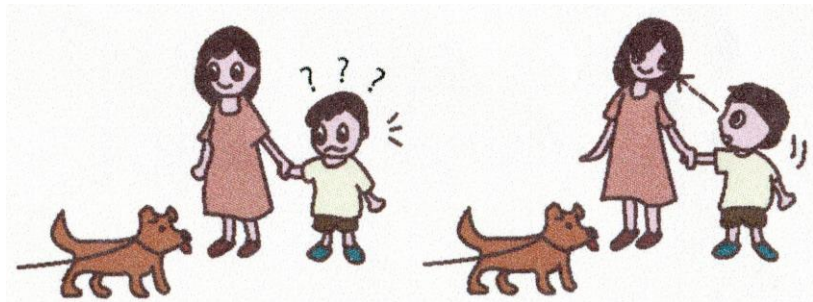
■興味があるものを見せに持ってくる



■大人の視線を追って、大人が見ているものを見る



■いつもと違うことがあると、親の顔を確認する



●ワンポイントアドバイス

お子さんの人と関わる力やコミュニケーションの力は、日々の経験の中で育ちます。

家庭や地域の実情に合わせて、児童館など同年齢のお子さんと遊べる場所に出かけましょう。

過程にはないような遊具で遊んだり、同年齢のお子さんと関わったりするなど、色々な経験ができる機会を持ちましょう。

みてみて☆1歳6か月児 ～子どもの心と体を育てよう～

☆この時期のお子さんの特徴☆

- ・興味ที่กว้าง, 気になるものや欲しいものなど、指をさして教えてください。
- ・人に関わることが活発になり、やりとりを楽しむことが増えます。
- ・物の名前を理解し、ことばを話すようになります。

○運動

- ・物を持って歩いたり、しゃがんだり、障害物を避けて歩きます。



○遊び

- ・おもちゃのシャベル・コップ・包丁など道具を使って遊びます。
- ・電話をする「ふり」などをして遊びます。
- ・大人とのやりとりを楽しむようになります。



○ことば

- ・名前を呼ぶと振り向きます。
- ・「持ってきて」など大人の言うことを理解し行動します。
- ・身の回りの物や、好きなキャラクターなどの名前が分かります。
- ・「ワンワン」「プープー」「チャーチャ」などのことばを話します。

☆こんな遊びが楽しめます☆

○体を使った遊び



○ごっこ遊び（ふり遊びっこ）、指先を使う遊び



○ことば、関わり



☆ワンポイントアドバイス☆

人とのやりとりの中で、コミュニケーションが豊かになり、ことばの理解・発語が広がります。

特にこんな場面では、子どもの興味や気持ちを感じ、優しく共感した関わりが大切です。

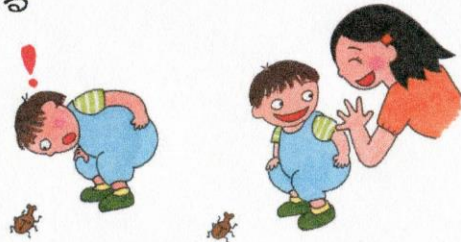
○ 興味のあるものを指さして伝える



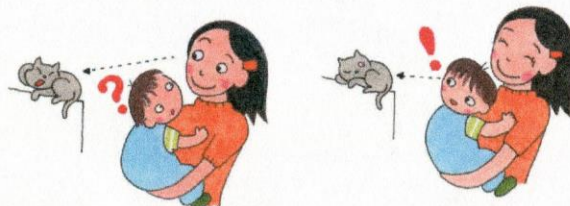
○ 興味のあるものを持ってくる



○ 興味のあるものを目で伝える



○ 大人の視線を追う



* 視線だけでもコミュニケーションができます。

☆このような時は相談しましょう☆

○ 運動

- ・片手を持っても階段がのぼれない。
- ・親を振り返らず一人でどんどん行ってしまう。
- ・コップを持って飲めない。



○ 遊び

- ・1人遊びが多く、手がかからない。
- ・食べ物でない物をなめることが好き。
- ・回るものや光るものを見る。おもちゃを横目でみるなど、見え方を楽しむことが多い。
- ・次々とほかのおもちゃへ興味に移る。同じもので遊び続け、遊びが広がらない。
- ・何でもないような音を極端に嫌がる。



○ 人とのやりとり

- ・視線が合わない。
- ・名前を呼んでも振り向かない。
- ・周りの人の真似をしない。
- ・バイバイができない。
- ・指さしをしない。



イヤイヤ☆2歳児 ~子どもの心と体を育てよう~

☆この時期のお子さんの特徴☆

- ・「イヤイヤ」など自己主張が強くなります。
- ・着替えや食事など自分でしがります。
- ・「ワンワン イタ」「ブーブー キタ」などの2語文を話すようになります。

○運動

- ・音楽に合わせて体を動かします。
- ・ボールをける、ぶらさがるなど全身を使った遊びが活発になります。
- ・積み木を高く積んだり、シール遊びなど指先を使った遊びをします。



○遊び

- ・ままごとや人形遊びなど、道具を使って、一人遊びや、やりとり遊びが広がります。



○ことば

- ・「ワンワン イタ」「チャーチャ ノム」など物の名前以外に動詞が使えるようになります。
- ・「なあに？」と質問することが多くなります。
- ・部分的に歌を歌います。

☆こんな遊びでやりとりが楽しめます☆

○体を使った遊び



○ごっこ遊び、指先を使う遊び



○ことば、関わり



☆ワンポイントアドバイス☆

個人差がありますが、2歳から3歳頃は「イヤ・イヤ」を連発するなど第一次反抗期がみられます。また、かんしゃくを起こしやすく、お母さんもお父さんも関わりにくさを感じます。

ですが、これは発達の過程でみられることでとても大切なことです。



○「イヤ イヤ」反抗期への対応

感情的に子どもに向き合うのではなく、「どっちにする?」と子どもに選ばせたり、「お茶 飲もっか」と目先を変えて対応するのも効果的です。



○かんしゃくへの対応

「自分でする」「1人でする」でもまだ上手くできないので、かんしゃくをおこします。叱らずに、やりたい気持ちを大切に、出来たことをほめましょう。このためには、親御さんにゆとりが必要です。家族に協力してもらうことも大切です。



*「もう一回つくろうか」と気持ちにより添います

*気持ちを代弁してあげましょう

☆このような時は相談しましょう☆

○運動

- ・手すりを使っても階段の登り降りが苦手。
- ・両足ジャンプができない。
- ・ストローを使って飲めない。

○遊び

- ・他の子どもの遊びに興味がない。
- ・人形遊び、ままごとなどのごっこ遊びをしない。
- ・一人遊びが多い。
- ・何でもないような音を極端に嫌がる。手が汚れることを極端に嫌う。



○人とのやりとり

- ・親の怒った顔や笑った顔にあまり反応しない。
- ・迷子になる。

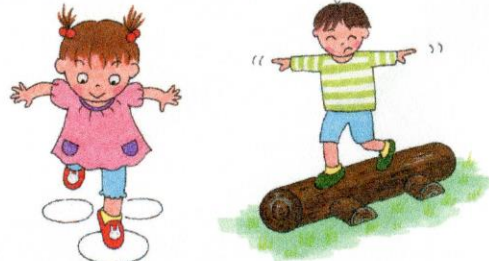


☆この時期のお子さんの特徴☆

- ・自己主張が強くなります。
- ・ことば、運動能力、食事、排せつ、着替えなどの生活習慣が目覚ましく向上します。

○運動

- ・片足ケンケンが楽しめます。
- ・ブランコ遊びや平均台の上を歩くなど、バランス遊びができます。



○遊び

- ・鉛筆を持って丸を描いたり、ハサミやノリなどを使って工作を楽しみます。
- ・ごっこ遊びが盛んになり、友達と遊びます。



○ことば

- ・ことばでのコミュニケーション（やりとり）が出来るようになります。
- ・姓名、性別、年齢が言えるようになります。
- ・絵本のストーリーが理解できつつあります。



☆こんな遊びが楽しめます☆

○体を使った遊び



○ごっこ遊び、指先を使う遊び



○ことば、関わり



☆ワンポイントアドバイス☆

○「なぜ・どうして・なんで」への対応

しつこいほどの質問せめは成長のあかしです。

子どもと一緒に考えるいい機会にしましょう。

親はイライラしやすい時期です。自己主張が強く言うことを聞かない。
食事や片づけなど身の回りの世話はもううんざり・・・、そんな時はつい
大声で叱ってしまいがちですが、子どもはかえって言うことを聞かなくなります。

怒る前に、まず親御さん自身が一息ついてから子どもと向き合しましょう。



部屋を出る



深呼吸



水を飲む

○声掛けを工夫しましょう CCQが効果的です

Calm：穏やかな気持ちで、子どもの目を見て話しかけましょう

(カーム) 目線が合っているとお互い表情がわかり、ことばも入りやすいです。

Close：もう少し近づいて、子どもと同じ目線の高さで話しましょう

(クローズ) 落ち着いて話せる場所を選びましょう。気が散るところでは伝わりません。

Quiet：静かな声で、いけないことは毅然と、ほめる時には優しく。

(クワイエット) 「〇〇したかったのね」と共感的態度で接しましょう。



☆このような時は相談しましょう☆

○運動

- ・転びやすい。
- ・ジャンプや段差を飛び降りることが出来ない。

○遊び

- ・一人遊びが多い。ごっこ遊びに興味がない。
- ・こだわりが強く決まった遊びしかしない。
- ・ふいに飛び出して、その場からいなくなる。
- ・無謀な事を平気でする。



○人とのやりとり

- ・視線があわない。自分の名前が言えない。
- ・会話が成立しない。
- ・周囲に興味がない。



Q.お子さんやご家族にとって、早期に発達評価や支援を受けることはどんな意味があるのですか？

- コミュニケーションの発達を促進します
- 家族のメンタルヘルスが向上します
- 子どもが必要とするニーズが気づかれやすくなり、子どもが安心して暮らせます
- 健全な自己理解の育ちに役立ちます

Q.保護者の理解と協力を得るには どうすればいいですか？

- 子どもの特徴を的確に理解することは、子どもにも家族にも気持ちにプラスの面を持つことを伝えます
- 子どもの特徴を的確に理解することは、毎日の子育てに役立つ、实际的なメリットを打ち出します
- 子どもの将来に繋がる第一歩であることを強調します

Q.保護者からの質問にはどのように説明したら、不安を与えず正しく目的を伝えることができますか？

保護者の気持ちを常に配慮しながら

- ・子どもの養育を常に応援するという姿勢と
- ・保護者が必要とする具体的な支援を示しましょう

Q.病院を受診されて、更なる評価が必要な
お子さんの保護者には、どのように説明し
たらいいですか？

- 「子どもの発達の仕方はひとりひとり、様々です」

個人差を強調しましょう

- 「お子さんのコミュニケーションの発達の仕方は、多くの平均的な
お子さんのとは少し違っているように思われます」

平均との違いを指摘しましょう

- 「現在のお子さんの発達状況に一番合った遊びや関わりを
工夫しましょう」

専門的な行動観察や発達検査の意義を説明しましょう

Q.支援の最初のステップとして、何をすべきでしょうか？

- 第一に、社会性やコミュニケーションの発達を中心に全般的な発達評価をします
- 次に、個別の評価を踏まえて、支援計画を立てます
- 発達評価は一回で終了ではなく、成長とともに定期的に行う必要があります

Q.お子さんの発達の特徴がつかめたら、次に何をすべきでしょうか？

お子さんと家族のニーズに合う継続支援の方向性を選択します

- ・ 個別療育
- ・ 集団療育
- ・ 幼稚園・保育園での支援
- ・ 上記の組み合わせなど

重点の置き方には個別の判断が必要です

Q.地域の保育園や幼稚園とはどのような連携をすればいいのでしょうか？

- 保育園や幼稚園では、家庭と違う子どもの様子がみられます
- 社会性やコミュニケーションの弱い子どもは集団の中で目立ち易いです

他の子どもと遊ぶよりも、ひとり遊びが好き

かかわりが一方的でトラブルになりやすい、多動など

- 保育士が子どもの特性を理解し、最適な支援ができるように
検査情報を伝えるなどして、子どもに対する理解を共有する
工夫をします

Q.療育施設に通園しなくてもいいのでしょうか？

早期発見の事後フォローの仕方は、

- ・子どものニーズ
- ・家族のニーズ
- ・地域の事情 などによって色々な方法があります

この方法が絶対に正しい、という方法はありません

日本で行われている療育の殆どが集団療育で、TEACCHと言う療育方法です。一部はTEACCHでの個別療育もあります。

個々人に合わせた個別療育であるABA療育を行っている施設は、極一部しかありません。

療育は未来を変えうる

ASDの社会生活上の予後に影響をする因子

- ① 知的能力
- ② **適切な**療育を受けたかどうか
- ③ 社会不適応の既往

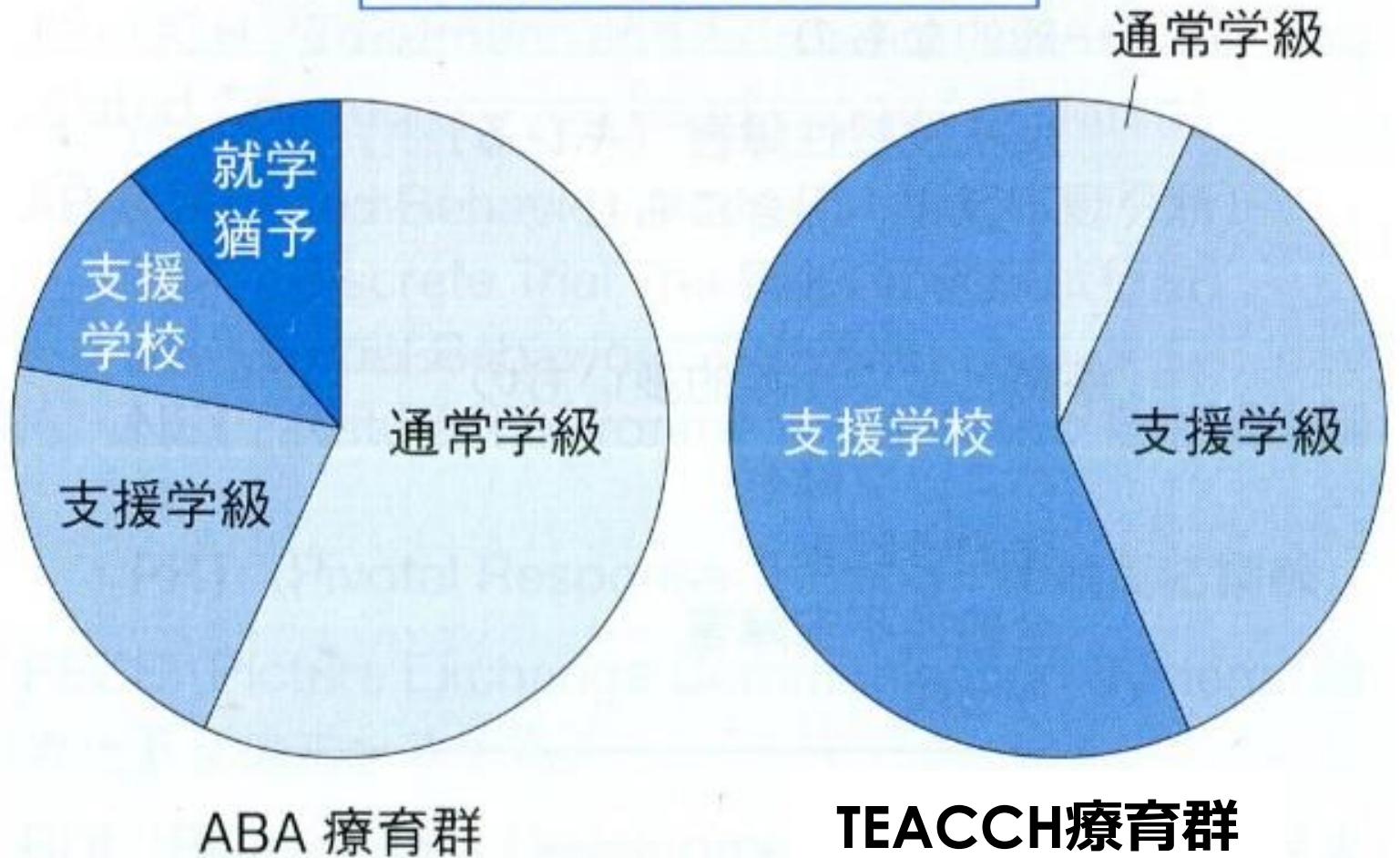


図 小学校就学の内訳
(平岩³⁾, 2012 より一部改変)

「発達」を見ていく際のポイント

▶ 乳幼児期

乳幼児期は人に向けての
コミュニケーションが芽生える時期です

模倣

- ▶ 生後9ヶ月ごろから、子どもは真似をしたがるようになる。
- ▶ 大人が日ごろおこなっている、化粧や歯磨きなどを、傍でじっと観察して、真似しようとする。
- ▶ また、「あー」、「うー」など、大人の声と同じように声を出す。

- ▶ 余裕がある時には、子どもの色々な動作や声を真似したり、また、子どもに真似してもらったりといったやりとり遊びをしよう。
- ▶ 大人の真似をするのは、子どもが周囲の人に興味をもっている証拠。これから言葉を覚え、毎日の生活習慣をつけるうえで、とても大切な対人コミュニケーションの第一歩。

模倣を引き出す遊びの工夫

- ▶ 子どもが興味をもちそうな、おもちゃを用意しよう。
車や飛行機のミニチュア、動物のぬいぐるみ、おもちゃの電話機やコップなど。

- 子どもと向かいあって遊びながら、車を「ブーブー」と言いながら動かすのを見せてから、子どもに車を渡すと、子どもは喜んで同じようにして遊ぶ。
- コップで「ゴクゴク」と音を立てて飲むふりや、電話の受話器を耳に当てて「もしもし」と話すふりをしてみる。
- 子どもが喜ぶようないろいろな動作をしてあげよう。

呼名反応

- ▶ 座位ができるようになったら、子どもに「○○ちゃん」と呼びかけてみよう。
- ▶ それが自分の名前だと、まだ理解していなくても、大好きな人に呼びかけられていることはわかって、呼んだ人の方を振り向く。
- ▶ 大人がニッコリと笑いかけると、子どもも嬉しそうに笑い返してくる。これは、大人の呼びかけに反応し、相手からの関わりを待つというコミュニケーションが、子どもに芽生えているという証。
- ▶ 子どもが他のことに夢中になっていたりすると、呼んでも振り向かないことがある。その時は、少し待ってからもう一度声をかけてあげる。

「呼名反応」を引き出す遊びの工夫

- ▶ 遊びながら、さりげなく「○○ちゃん」と呼びかける。
子どもは呼んだ人の方をしっかりとみる。

呼びかけに振り向いたり、目を合わせたりすることで、
「呼びかけに気づいたよ。なあに？」という合図を
大人に送り、コミュニケーションを始めようとしている。

指さし

- ▶ 1歳過ぎ頃から、「指さし」（手の届かないところにある物などを示すために、人差し指を向ける）をするようになる。
- ▶ まだ十分に言葉を話せない子どもにとって、指さしは、自分の要求や興味のある物を大人に教えたりするための、大事なコミュニケーションの道具。
- ▶ 子どもは、指さしをしながら、大人の顔を覗き込んだり、声を出したりして、一生懸命に何かを訴えてくる。
- ▶ もし子どもの言いたいことがわかったら、「ああ、ミルクが欲しいのね」、「あら、かわいいワンちゃんね」などと語りかける。
- ▶ そうすることによって、子どもは新しい言葉を覚えていく。また、自分の思いが大人に通じたことがうれしくて、もっともっと伝えようとする。やがて上手にお話しできるようになると、指さしは減っていく。

「指さし」を引き出す遊びの工夫

- ▶ まだ十分に言葉が話せない子どもは、「欲しい」と思ったり、「こんな面白いものがあった」と思ったりしたときに、なんとかして大人に自分の思いを伝えようとして指さしをする。
- ▶ 子どもが好むものや興味をもつものが何なのかを解かってあげることが大切。子どもの好みのおもちゃや興味があるものを使って遊んであげると、指さしが自然とたくさん出てくる。
- ▶ ときには、好みのおもちゃとそうでないおもちゃを2つみせて、どちらが欲しいのか、指さしで選ばせてもいい。
- ▶ 大人がシャボン玉を吹いて遊んであげたりすると、子どもはとても興味を引かれて、伝えるための指さしが出てくることが多い。
なお、子どもが自分でやりたがる際には、シャボン玉液を飲み込まないよう注意する

ごっこ遊び

- ▶ 「ごっこ遊び」は、物をまるで別の物のように見立てて行う遊び。人形をまるで生きている人間のように扱い、口に食べ物を運んで食べさせるふりをしたり、相手が「チョーダイ」というと、食べ物に見立てた物をお皿に載せて「ドーズ」と差し出したりする。
- ▶ 最近は実物さながらのおもちゃも多いが、発達にとって大切なのは、身の回りにある何でもないものを本物に見立てる力。砂を御飯に見立てて茶碗に入れたり、積み木を車に見立てて「ブー」と走らせる様子がみられたりしたら、ごっこ遊びに発展した証拠。
- ▶ できたら、大人も一緒に遊んであげる。大人がごっこ遊びをすると、「○○頂戴」、「○○っておいしいね」などと場面に合った言葉かけをすることで、遊びが広がる。子どもの想像する力がさらに刺激され、遊びのレパートリーが広がる。
- ▶ 幼稚園・保育所では、お店屋さんごっこや電車ごっこなど、仲間とのやりとりを豊富に取り入れた複雑な遊びに発展していく。子どもは人とのごっこ遊びを通じて、世の中の色々な役割やルールを覚え、経験を蓄えていく。

「ごっこ遊び」を引き出す遊びの工夫

- ▶ 人形やぬいぐるみ、食べ物のミニチュア、お皿、コップ、ティーポット、フォーク、ナイフなどを用意して、おやつパーティを開いてあげよう。子どもは、それらのおもちゃを見ると、自分がいつもしてもらっていることを自然に思い出して、ごっこ遊びを始める。

たとえば、人形やぬいぐるみに食べ物を食べさせたり、大人に食べ物や飲み物を差し出したりするごっこ遊びが気に入るかもしれない。その他、おもちゃの受話器をもって電話で話しているふりをしたり、おもちゃのフライパンで料理するふりをしたりもする。男の子は、おもちゃの車や飛行機に人形を乗せるなどして遊ぶのが好き。女の子は、ぬいぐるみや人形の着せ替えをしたりして遊ぶのが好き

「発達」を見ていく際のポイント

▶ 学童期

学童期とは？

- ▶ 学童期の最大の特徴は、子どもの生活する場が、家庭から学校へと移ること。
- ▶ 保育所や幼稚園でも友だちや先生との関わりはあったが、小学校にあがると、人との関わりはさらに広がり、学校の建物そのものも大きくなる。
- ▶ 時間割が決まっていて「4時間目は音楽なので音楽室で授業をします」「明日までに3ページまで漢字の書き取りをやっておきましょう」などと指示されて、その通りにやらなくてはならないことがたくさん出てくるのも大きな変化。

学校という規律のある集団へ

- ▶ 学童期前半には、友達との遊びや学習を通して、家庭の中で培ってきたルールや価値などの摺り合わせを行う時期。
- ▶ この時期に多くの友達と出会い、付き合う中で、様々な知識や体験を得たり、集団の中で上手に過ごしたりするための方法を身につける。
- ▶ 時には競争をしたり、ともに喜びあったりしながら仲間関係を築き上げ、親密になっていく時期でもある。

遊びや学習を通して身につけるルールや価値観

- ▶ 学童期後半には、相手の立場に立ったものの見方ができる様になるのが大きな特徴。
- ▶ 同年代、とくに同性の友人とのコミュニケーションも密になる。Gang age(ギャング時代)と呼ばれる様に、仲間意識が強くなり、家族や大人の価値観よりも仲間の価値観を優先させて、徒党を組んで悪戯や悪さをするようになる。こういう体験を通して、グループの規律を守って協力行動をとる、という社会的行動の素地が培われる。
しかし、同時に、同年代からの評価に敏感になり、イジメられた、意地悪された、など対人関係の問題を訴えることが増える時期でもある。

発達障害の子ども発達と特徴

幼児期にみられる特徴

▶ ADHA, ASD, LDなど発達障害のある子供の

幼児期に共通する特徴

- 多動性（まとまりのない行動）
- 言葉の遅れ（指示の通り難さ）、
- 衝動性（目立つやんちゃさ）
- 手先や身体全体を使った運動面で、遅れや、ぎこちない動き（＝発達性協調運動障害）

気になる子には、理由がある

- ▶ すごく得意な分野がある一方、極端に苦手な分野があるなど、発達の凸凹があり、気になる子をみかけることがある。
- ▶ 毎日の生活場面で「どうして何度いってもわからないのだろう」と思うこともある。

気になる子の行動には何か理由がある。

- ▶ 子どもに生活し難さがあるならその子を取り巻く環境をよく観察する。
- ▶ 対応を工夫して環境を整えることで、問題と思われていた行動が軽減することがある。
- ▶ 家庭環境の問題や身体疾患などの病気も、気になる行動の原因になる。

気になる行動と気づきのポイント

- ▶ 他人との関わり方
- ▶ コミュニケーション
- ▶ イマジネーション・想像性
- ▶ 注意・集中
- ▶ 感覚
- ▶ 運動
- ▶ 学習
- ▶ 情緒・感情

他人との関わり方

友だちと一緒に遊ぶことが苦手な子

- ▶ 齢相応に相手の気持ちを想像するのが苦手？
- ▶ 場の雰囲気共有することが苦手？
- ▶ 状況に合わせたやりとりが苦手？

その子にあった集団への参加のしかたを工夫する必要がある。

※気づきのポイント（他人との関わり方）

- ▶ ひとり遊びが多い、一方的でやりとりがしにくい
- ▶ おとなしすぎる、常に受動的
- ▶ 大人や年上の子、あるいは年下の子とは遊べるが、同級生とは遊べない

コミュニケーション

- ▶ おしゃべりだけど、「相手にわかるように伝える」ことが苦手な子
- ▶ 話すことに比べて、「聞いて理解する」ことが苦手な子
- ▶ 表情や声の調子など「言葉以外の状況から理解する力」が弱い子



- ▶ 具体的でわかりやすい環境設定や声かけ、
- ▶ 本人が言おうとしていることを整理して聞くなどの工夫が必要。

※気づきのポイント（コミュニケーション）

- ▶ お話は上手で難しいことを知っているが、一方的に話すことが多い
- ▶ おしゃべりだが、保育士や指導員の指示が伝わりにくい
- ▶ 話を聞かなければならない場面で離席が多い、聞いていない

イマジネーション・想像性

- ▶ 相手の気持ちを想像することが苦手、
- ▶ 暗黙のルールなどがわからない
- ▶ 場にそぐわない発言や行動をする。
- ▶ 急な状況変化に対応できずに暴れたり、パニックを起こしたりする

- ▶ 場面や状況
- ▶ 相手の気持ち
- ▶ 先の見通しや予定
- ▶ 具体的なやり方



視覚化したり
教示したりする

※気づきのポイント（イマジネーション）

- ▶ 相手にとって失礼なことや相手が傷つくことを言ってしまう
- ▶ 友だちがふざけてやっていることをとらえ違えて、イジメられたと思ってしまう
- ▶ 集団で何かしている時にボーッとしていたり、ふらふらと歩いている
- ▶ 急な予定変更時に不安や混乱した様子がみられる

注意・集中

- ▶ 注意の配分が上手くできない人は、
 - ・ たくさんの感覚を同時に処理することが苦手
 - ・ 同時に二つのことができない、
 - ・ 考え事をしていたりすると指示を聞きそびれてしまう
- ▶ 注意がそれやすい人は、
 - ・ 新しい刺激があるとそれに気が向いてしまい、今やっていることを忘れてしまう。

▶ 声かけをして注意を喚起する

▶ 気が散らないようなシンプルな環境にする

※気づきのポイント（注意・集中）

- ▶ 一つのことについて没頭すると話しかけても聞いていない
- ▶ 落ち着きがない、集中力がない、いつもぼんやりとしている
- ▶ 忘れ物が多い、毎日のことなのに支度や片づけができない

感覚

感覚の敏感さ、鈍感さのために生活場面で困ることがある。

- ▶ 無理をさせない方法を考える。
- ▶ 落ち着くことができる場所を用意し、刺激を減らすことで安心できたり、我慢できたりする。
- ▶ 好きな感覚をみつけてあげる。
好みの感覚は安心感、リラックスや気分転換などに使える。

※気づきのポイント（感覚）

- ▶ ざわざわした音に敏感で耳をふさぐ、
雷や大きな音が苦手（聴覚過敏）
- ▶ 靴下をいつも脱いでしまう、
同じ洋服でないとダメ、
手をつなぎたがらない（触覚過敏）
- ▶ 極端な偏食（触覚過敏・味覚過敏・嗅覚過敏など）
- ▶ 揺れているところを極端に怖がる（平衡感覚過敏）
- ▶ すき間など狭い空間を好む

運動

- ▶ 身体全体を使った運動、細かい手先の操作や、協調動作の苦手さがみられる場合がある

- ▶ 身体を使って楽しむこと
- ▶ できることが何かを探してみる。
- ▶ 叱責は厳禁

※気づきのポイント（運動）

- ▶ 身体がクニャクニャとしていることが多い、
床に寝転がることが多い
- ▶ 極端に不器用、絵やひらがなを書く時に筆圧
が弱い、食べこぼしが多い
- ▶ 運動の調整が苦手で乱暴に思われてしまう、
大きすぎる声

学習

- ▶ 得意分野と苦手分野の差が極端にみられることがある。
- ▶ 周囲から「〇〇博士」と呼ばれるぐらい物事を覚えることが得意な子も

学習の工夫とともに、得意なことを伸ばして生活に生かす。

※気づきのポイント（学習）

- ▶ 話が流暢で頭の回転が速いことに比べて、作業が極端に遅い
- ▶ 難しい漢字を読むことができる一方で、簡単なひらがなが書けない
- ▶ 図鑑や本を好んで読むが、作文を書くことは苦手

情緒・感情

- ▶ 感情のコントロールが苦手。
- ▶ 周囲から見ると、こんなことでどうして怖がったり怒ったりするのだろうと不思議な印象を持つ。



この背景には、想像することが苦手であったり、感覚の過敏さがあったりするなど、複数の要因が考えられる。

ちょっとしたことに躓いて、自信を失いがちなので、安心感や成功体験が増えるように支援する

※気づきのポイント（情緒・感情）

- ▶ 極端な怖がり
- ▶ 些細なことでも注意されるとかっとなり易い、思い通りにならないとパニックになる
- ▶ 一度感情が高まると、なかなか興奮が収まらない



気づいた後の対応のポイント

子どもの特性を知り、環境を整える

- ▶ 子どもに生活し難い様子が見られれば、何に困っているのかよく観察することが大切。
- ▶ その子らしさを発揮しやすい状況はどういう条件がそろった時なのか、観察した様子を整理してみる。
- ▶ 好きなことや得意なこと、嫌いなことや苦手なことが何か、特性を知り環境を整えることで、 unnecessary ストレスや失敗体験をなくすように努める。
- ▶ その子が安心できる環境をつくることが大切

わかりやすい環境を用意する

- ▶ 子どもにとって判り易く行動し易い環境を整えることにより、力が発揮し易くなる。
 - ・ 見てわかるようにする
 - ・ 見通しがたてられるように事前に予告したり、手順やルールを明確にしたりする
 - ・ 具体的に伝える
 - 例) やり方の見本を用意する、一緒にやってみる
 - 例) 「～したらダメ」と否定するのではなく、「～しよう」と代わりになる方法を伝える
 - 例) 自由な時間をどう過ごしていいのかわからない子には、余暇時間のスケジュールを提供する

こころの育ちを支える

- ▶ 大人との信頼関係をつくり、好きなことや得意なことなどを利用して「やってみたい」「自分にもできる」という気持ちを育み、自信や自己肯定感を高めることが大切。
- ▶ その子らしく健やかに育つように支援する。
- ▶ 苦手なことに対しても少し頑張ってチャレンジできるようになるには、そのような心の育ちが必要。

心の準備のできていない親への対応

幼稚園・保育所で見られる気になる子

「指示に従わない」
「集団行動ができない」
「人とかかわることが苦手」
「動きが多く落ち着かない」
「こだわりが強い」 等



発達障害の子どもによく見られる特性と思われる状態像を示すことが多い。

これらの状態像は、集団生活の中で顕著になり観察されやすい状態像

親が自分の子どもの障害に気づくより先に、第三者（保育士、保健師、医師）が子どもの発達に異常があることを捉えてしまう

発達障害に気づく以前の親

- ▶ 子どもがまだ極低年齢であれば、親は、たとえ子どもの発達の遅れや養育のしづらさを一部感じてはいても、それを殊更「異常」, 「問題」, ましてや「障害」と認識するとは限らない.
- ▶ 発達が異常かもしれない, 問題になるかもしれないとまで思ったとしても, その考えを「個人差の問題だろう」とか「一時的なものに過ぎないだろう」との希望的な主観に置き換えがちである.
- ▶ 「障害」と自ら結びつけて考えることの方がむしろ少ない

心の準備のできていない親へ伝えると言う事

- ▶ 心の準備が必ずしもできていない状態の親に対して、こどもに発達障害がある（その疑いも含め）ことをしっかりと伝え、その情報にもとづいて親が療育を要望するような自己決定がなされなければ早期療育は始められない。
- ▶ こどもの発達に異常があって、それが一時期だけのものでなく永続的な障害となる可能性を多分にもつことを親に伝えるのは、決して容易なことではない。

心の準備のできていない親へ伝えると言う事

- ▶ 親が子どもに障害がある（疑いも含め）ことを知ることと、その親がこどもの療育を要望するまでに動機づけられることとの間には大きな隔たりがある。
- ▶ その間に介在し、親の心の支えになり、養育への有益な助言を与え、そして障害が発見された子どもを療育に導入することが治療者の最初の仕事。



医療機関での発達障害を持つ親への説明

親に子どものことをもっと理解してもらうために

アセスメント結果に基づき、子どもの全体的な発達と対人コミュニケーション行動の特徴を伝えるポイント

- (1) 子どもの全体像を伝える
- (2) 今後の対応で子どもの発達が伸びる可能性を伝える
- (3) 今後の対応の工夫の仕方を伝える
- (4) 定期的なアセスメントの必要性を伝える
- (5) 親が疑問に思っていることがないか尋ねる

一方的に話すのではなく、適宜、親が理解しているか、質問はないかなど確認しながら伝える

（１）全体像を伝える：整理のポイント

子どもの全体像の整理のポイント：

- ▶ 全般的な発達水準
- ▶ 対人コミュニケーション行動
- ▶ こだわり
- ▶ 遊び方
- ▶ その他の特徴（多動、不器用、感覚過敏など）
- ▶ 性格・気質

それぞれについて、親の主訴に対応しながら特徴を伝え、
親が子どもの全体像を理解できるようにする

(1) 全体像を伝える：伝え方のポイント

- ① 強みと弱みの両面を伝える
- ② 親の主訴と関連させて伝える
- ③ 弱みを伝える時には：
 - 誰と、どのような場面で、どのような行動ができる／できないのか、具体的に伝える
- ④ その行動が人と関わる力を伸ばす上で大切であること（あるいは問題となること）を伝える
- ⑤ 人と関わる力を伸ばしていくための対応の工夫を伝える
- ⑥ 親がよい関わりや工夫をしている場合にはほめる



(2) 今後の対応で子どもの発達が伸びる可能性を伝える

低年齢の幼児は、発達の個人差が大きい

周囲が子どもの発達の状態や特徴に合わせた対応をすることにより、子どもにとって周囲の世界が分かり易くなり、また子どもの意欲の芽生えにつながる

(3) 今後の対応の工夫： 発達支援の原則

- ・ 対人コミュニケーション行動については、芽生えつつある行動を伸ばす。（芽生えがあるかどうかはアセスメントで判断が必要）
- ・ こだわりについては、固定化を予防するために、行動と興味のバリエーションを広げる。

（特定の音や触覚など感覚面で敏感・苦手なものがあれば避ける工夫も大切）

子どもの特徴に合わせた対応をするためには、子どものことをよく知った上で、工夫することが必要。専門家の知恵を借りた方が良いことに気づいてもらう。

(3) 今後の対応の工夫： 様々な支援があることを知ってもらう

- ◆ 家庭でできることを一緒に考える
- ◆ 地域の社会資源を使う
 - ・ 療育機関での個別／小集団療育など
 - ・ 児童館や子育て家庭センターで同年齢の他児と関わる機会を増やすなど
- ◆ (保育所等に通っている場合) 保育士との情報共有

(4) 定期的なアセスメントの必要性

子どもの発達特性は、

- ・年齢と共に変わっていく
 - ・周囲の対応の仕方によっても変わっていく
- 現在必要な対応が将来もずっと必要とは限らず、
発達と共に対応を変える必要がある

その時の子どもが必要とする支援を考えるために、定期的なアセスメントが必要 (頻度：少なくとも1年に1回)

※地域の実情に合わせ、どこでアセスメントを受けられるかという情報も含めて伝える
(医療機関、療育機関など)

(5) 疑問に思っていることはないか尋ねる

説明してきた内容について

- ・ 親が理解しているか、
- ・ 子どもの家での様子とかけ離れていないか、
- ・ 親の主訴について話し合えたか、
- ・ その他、気になっていることはないか
- ・ 新たな疑問は出てきていないか、など尋ねる

面接を子どものことを一緒に考える場として、親に認識してもらうために、親の疑問も丁寧に尋ねる。

まとめ

- ◆親に子どもの特徴を伝えることは、何かを宣告するためではなく、親に子どものことをもっと理解してもらうためである。
- ◆親が子どもの特徴の理解がすすむと
 - ・子どもの特徴に合わせた対応や関わりをする
 - ・子どもが必要とする支援を受けることにつながる。
- ◆それにより、親は育児を楽しむことができるようになり、また、子どもの発達が促進されることを目指している。

Take Home Message

- ▶ 園で「気になる子」は多くの場合、発達障害の特性を持っている。
- ▶ 早期療育を行うためには、早期に発達障害の特性に気づくことが大切である。
- ▶ 子どもが低年齢であれば、親は子どもの発達の遅れや養育のしづらさを感じていても、「障害」と認識していない。
- ▶ 親に子どもの特徴を伝えることは、何かを宣告するためではなく、親に子どものことをもっと理解してもらうためであり、それが、その子の発達を伸ばすことにつながる。